

語彙の意味評価性に及ぼす音象徴効果

ストループ課題による検証

水谷聡秀 雨宮俊彦

(関西大学社会学研究科 関西大学)

key words : 音象徴 ストループ課題 評価

問題

人間が語彙の意味に備わる評価性を音声で判断するとき、その判断に音声の非言語情報が影響する。Ishii, Reyes, & Kitayama (2002) は、肯定的、あるいは否定的といった評価の判断において、語彙の意味と語彙の発話の際に伴う声質とのあいだに、干渉効果が存在することをストループ課題で示した。音声の非言語情報には、トーンや声の音色だけでなく音韻情報に備わる音象徴もあり、それが語彙の意味に備わる評価の判断に影響することも考えられる。たとえば、「暖かい」は明るいとして、「残酷」は暗いとして認知されるが、音象徴が、前者を明るく、後者を暗いと感じさせるような効果があると考えられる。語彙の意味的側面と音象徴的側面とのあいだで、評価(肯定・否定)が一致する条件では、不一致の条件よりも、語彙の意味的側面での評価の判断が速くなると考えられる。本研究では、ストループ課題を用いて、語彙の意味に備わる評価の判断に、音象徴が影響するのかを検討する。

方法

被験者 K大学の学生32名(男性14名、女性18名)
音声刺激の準備 音声刺激として、NTT データベース(天野・近藤,1999)の音声を使用した。本実験で音声に使用する語彙を選定するために、以下の予備調査と指標の算出を行った。名詞や形容詞などの複数の語彙について、熟知度評定とどのくらい肯定的か否定的か評価評定をK大学の学生19名に7件法で行った。また、清音と濁音、半濁音を含む仮名1字と拗音を含む仮名2字の文字から音声を思い浮かべさせ、肯定と否定に対応すると考えられる、明るさの評定をK大学の学生38名に7件法で行った。語彙の音象徴的側面として評価の指標を、語彙に含まれる各仮名の明るさの平均値とした。ただし、促音に関しては指標の算出には含めなかった。語彙の選定の条件として、次の3つがある。熟知度の高い、評定値が5.5以上の語彙である。意味的側面で、肯定的か否定的かを表す評定値が、5.5以上か2.5以下の語彙である。音象徴的側面で、明るさを表す指標が、平均値から標準偏差以上はなれている(4.5以上か4.0未満)値の語彙である。以上3つの条件をすべて満たした語彙から20語(表1参照)を選定した。また、意味的側面では肯定的か否定的であり、音象徴的側面では明暗のない中立的な語彙などを追加し31語を選択した。

手順 被験者はヘッドフォンを着用し、ランダムな順序で提示される音声刺激を聞き取り、語彙の意味が明るい暗いかどちらであるか判断課題を行った。その際、実験前に単語の響きを無視して意味だけで、できる限り早く正確に判断を

行うことを伝えた。また、練習試行を10回繰り返し、各判断後に正解を提示したが、本試行では正解を提示しなかった。

表1 音声刺激に使用された語彙

		音象徴側面					
		+			-		
意味側面	+	愛	暖かい	笑い	抜群	自然	満足
		活発	立派		充実	笑顔	
	-	処刑	嫌い	悪魔	地獄	惨い	残酷
		辛い	嫌らしい		陰険	怪我	

結果・考察

反応時間の素データを開平変換し、その外れ値と追加された語を除き分析した。全群を通した平均値から標準偏差の2倍以上はなれている値を外れ値とした。意味的側面の要因(肯定・否定)×音象徴的側面の要因(肯定・否定)で反応時間を従属変数とした2要因の分散分析の結果、交互作用は有意ではなく、一致・不一致要因で分散分析した結果においても、主効果は有意ではなかった。しかし、語彙を漢語(音読みの語)群と和語(訓読みの語)群に分類し、各群で、一致・不一致要因で分散分析した結果、和語群では有意ではなかったが、漢語群で主効果が有意($F(1,365)=4.02, p<.05$)であった。一致条件では、不一致条件とくらべて意味的側面での評価の判断が速いことが示され、漢語と和語とでは音象徴の影響は異なると考えられる。また、語彙の熟知度は、5.5以上であり、漢語と和語の両方において反応時間と熟知度との相関はない($r=0.01, n.s$)と考えられ、漢語と和語とのあいだに熟知度の有意な差はないことから、音象徴からの影響の違いは、熟知度によるものではなく、ほかの要因によるものだと考えられる。漢語に関しては、語彙の意味に備わる評価の判断に音象徴が影響することが示された。今後、漢語と和語とで音象徴からの影響の違いを生じさせる要因を考慮しながら実験計画を検討する必要がある。その際、語彙の音象徴的側面の指標として、加算的に求めてよいか、形容詞では、語尾に「い」が入ることにより、音象徴的側面での評価が高くなる傾向があるが、それをどうするか、トーンの統制された音声をどのように作るかなども含めて検討する必要がある。

謝辞：本研究は、関西大学社会学部の袴田彩希子さん、益子恵美さん、および山本樹里さんにご協力いただきました。本研究は、日本学術振興会科学研究費(14510237)の助成を得ています。

[引用文献]

天野成昭・近藤公久(編)1999 日本語の語彙特性(NTT データベースシリーズ)。三省堂。

Ishii, K., Reyes, J. A., & Kitayama, S. 2003 Spontaneous attention to word content versus emotional tone: Differences among three cultures. *Psychological Science*, 14, 39-46.

(MIZUTANI Satohide, AMEMIYA Toshihiko)